浮気妻の制裁

第八巻　弄ばれるメスの心理

海老沢　薫　著

内容

■著作権について
■まえがき
■第一章　管理人に晒す極限の痴態
■海老沢薫ＢＬＯＧ
■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

※海老沢薫ＢＬＯＧ
http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/
・・・『羞恥』『露出』『辱め』をテーマにした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■著作権について

「浮気妻の制裁　第八巻　弄ばれるメスの心理」（以下本書と表記する）の著作権は【海老沢薫】にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■まえがき

毎日の日課としてマンションの管理人室でストリップショーを披露することになった美しき若妻、萌々。

ただ、隣家の主婦、麻子は若妻のストリップショーだけでは飽き足らず、なんとマンション管理人の目の前で萌々に自慰行為まで強要する。

忌み嫌う管理人の前での屈辱的な命令に最初は抵抗する萌々だったが、自身の恥ずかしい写真をネタに麻子から脅迫されると、もう黙って従うしかなかった。

萌々は両脚を百二十度以上も開いた恰好で、目の前の椅子に座る管理人の顔を見つめながら剥き出しの秘部を指で弄り、背徳の快感に喘いだ。

さらに、麻子から笑顔を浮かべるよう命じられた萌々は、屈辱に悶えながらも死ぬ思いで引きつった笑みを浮かべていったのだった。

今までずっと生理的に受け付けなかった男

の顔を見つめながら背徳行為を続ける萌々は、次第に妖しい快感に全身が侵され、管理人に向かって呼び掛けながら喘ぎ始める。

「あぁん、管理人さん・・・あぁぁん」

若妻はもはやただの発情したメス犬と化し、忌み嫌っていた管理人の顔を見つめながらついに絶頂を迎えたのだった。

程なくして、萌々が快感の余韻から覚める と、麻子は若妻に対してさらなる屈辱行為を命じ・・・。

哀れな若妻は今度は一糸纏わぬ姿のまま四つん這いになり、目の前の椅子に座る管理人の顔を見上げながら、再び引きつった笑顔を浮かべ、自らの手で秘部を弄りメス犬のように悶え狂った。

麻子と管理人は四つん這いになった若妻の何とも淫らな姿にスマホのレンズを向けてシャッターを切り続け、やがて管理人室には再び萌々のメスの叫び声が高らかに響き渡るのだった。

■第一章　管理人に晒す極限の痴態

平日の昼下がり、美しき若妻、白石萌々は自宅マンションの管理人室で激しい羞恥に喘いでいた。

素っ裸で床に座り、両脚を百二十度以上も開いて大股開きさせられた萌々は、あろうことか両手を秘部に伸ばし、自らの指で陰嚢を左右に広げてぎこちない笑みを浮かべていたのだった。

若妻の前に座るマンションの六十代の男性管理人と、隣の部屋に住む年増の主婦、麻子は、若妻の痴態をギラギラした目で眺めながら、不敵な笑みを浮かべていた。

「萌々ちゃん、私たちにアソコを見られてそんなに嬉しいの？」

死ぬ思いで笑顔を浮かべる若妻に対し、麻子はわざとその羞恥心を煽るような問いかけをした。

「そ、そんなことないです・・・」

萌々は胸の奥に湧き上がる怒りを必死に堪え、笑顔を浮かべたままそう答えた。

「もう一度聞くわよ。私たちにアソコを見られて嬉しいのかしら」

麻子はさっきよりも語気を強め再び問い掛けた。

どうやら麻子は若妻に痴態を晒させたまま、屈辱のセリフを吐かせたいようだった。それを悟った萌々は、笑顔を引きつらせながら、偽りの告白をするしかなかった。

「は、はい・・・そうです」

萌々が震える声でそう答えると、麻子はさらに若妻を追い詰めた。

「萌々ちゃん、もっと詳しく丁寧に答えてくれるかしら。できないなら、アナタが全裸で大股開きしている写真をマンション中にばら撒くわよ」

麻子はスマホで若妻の全裸大股開き姿を撮影すると、それをネタに萌々を脅迫した。

「そんな・・・」

隣家の麻子にまた新たな弱みを握られてしまった萌々は、思わず笑顔を崩して酷く怯えた表情を見せた。

「さぁ早く、笑顔でちゃんと言いなさい！」

麻子が有無を言わせぬ口調でそう命じると、萌々は怯えた心を奮わせて再び引きつった笑みを浮かべ、偽りに満ちた屈辱の告白をすることになった。

「私は、二人に、オ、オマ〇コを見られて、嬉しいです」

若妻が震える声でそう告げると、管理人はまたしてもズボンの奥で膨らんだイチモツを痙攣させた。

麻子は満足げな様子で、若妻の全裸大股開き姿をスマホでさらに何枚も撮影した。

「萌々ちゃん、アソコからまた一杯お汁が溢れ出てきているじゃない。アナタ、そんなに欲求不満なら今すぐそこでオ〇ニーしなさい！」

麻子が唐突にそう命じると、萌々は急に顔面

蒼白となり、管理人は興奮を隠し切れない様子で満面の笑みを浮かべた。

「萌々ちゃん、何してるの、さっさとオ○ニーして発散しなさいよ！」

麻子は再び語気を荒げた。

「お願いです、それだけは許してください」

管理人の前で極限のプレイを強要された萌々は、さすがに抵抗した。

忌み嫌う管理人の前でこれ以上の屈辱を味わうのは萌々には正直耐えられなかった。

萌々は大股開きで秘部を指で広げた恰好のまま、麻子に縋るような目を向けた。

「萌々ちゃん、私の命令に従わないならアナタのこの写真をプリントして、今夜マンション中のポストに配るわよ」

麻子はそう言って、自らのスマホ画面に映る全裸大股開きで笑顔を浮かべる萌々の写真を見せた。

「いやぁん」

自分のあまりにも恥ずかしい写真を見た萌々

は大きな喘ぎ声を漏らし悶えた。

こんな写真をマンション中にばら撒かれたら、もうこのマンションに住めなくなるどころか、この先の人生を生きていく自信さえなくなる気がした。

「わかりました・・・」

萌々はポツリとそう漏らすと、陰嚢を開いていた指を秘部の奥に挿入していった。

「あぁん」

萌々は悲しげな喘ぎ声を漏らし、ゆっくりと指で秘部を弄り始めた。

「萌々ちゃん、管理人さんの顔をちゃんと見ながらオ○ニーしなさい！それから笑顔も忘れずにね！」

なんと麻子は、萌々に笑顔を浮かべたまま管理人の顔を見てオ○ニーするよう命じたのだ。

それは、若妻にとってあまりにも過酷なミッションで、萌々は麻子を心から恨んだ。それでも、仕方なく顔を上げた萌々は椅子に座る管理人の顔を見つめた。

「いやぁん」

管理人と目が合った萌々はどうしようもない屈辱に襲われ、堪らず喘ぎ声を漏らした。

「萌々ちゃん、ほら笑顔！」

麻子が傍でそう促すと、萌々は屈辱に全身を震わせながら、ゆっくりと口角を上げていった。

「オオっ」

美しい若妻が全裸大股開きで秘部を弄りながら、自分に向かって何とも妖艶な笑顔を見せると、六十代の管理人は興奮して驚きの声を漏らした。

管理人は今までマンションの廊下などで美しい若妻とすれ違う度に邪な欲情を抱き、頭の中で様々な淫らな妄想を描いてきたが、さすがにこれほどまでに卑猥な姿は想像すらしたことがなかった。

「萌々ちゃん、管理人さんから目を逸らしちゃダメよ！」

オ○ニーに耽る若妻が恥ずかしさのあまり思

わず目の前の管理人から視線を逸らすと、すぐに麻子が厳しく叱責した。

そのため、萌々はずっと管理人の顔を見つめながらオ○ニーをし続けることになり、次第に全身が快感に侵されていく中で、まるで管理人とセックスをしているような錯覚に陥っていた。

「あぁん、管理人さん・・・あぁぁん」

萌々はいつしか喘ぎながら管理人に向かって呼びかけていた。

今までずっと忌み嫌っていた男にも関わらず、快感の中でその顔をずっと見つめている

と偽りの愛情のようなものが若妻の心の奥に湧いてきたのかも知れなかった。

若妻にアへ顔で呼び掛けられた管理人は、ズボンの奥で膨らんだイチモツを激しく痙攣させた。そしてこの夢のような光景を絶対に忘れないために、オ○ニーする若妻にスマホのレンズを向けシャッターを切った。

「萌々ちゃん、ほら笑顔でしょ！」

麻子がそう呼び掛けると、快感のあまりアへ顔を見せていた萌々はもう一度口角を上げて笑顔を作り直した。

しかし、若妻はもうすっかり全身が快感に侵されてしまったのか、その顔はすぐにまたアへ顔に変わってしまい、麻子から容赦ない叱責が飛んだ。それから、笑顔を作り直した萌々が暫くしてまたアへ顔を浮かべ、麻子から叱責されてまた笑顔を作り直すという展開が何度も繰り返され、いつしか若妻の美貌は笑顔でもアへ顔でもない何とも滑稽な変顔を見せるようになっていた。

麻子はもう萌々に笑顔を要求するのを止め、若妻がオ○ニーしながら見せる変顔を楽しんだ。

「あぁん、あぁぁん」

萌々は半開きになった口元から絶え間なく喘ぎ声を漏らし、淫らで滑稽な変顔を管理人に晒し続けた。

「萌々ちゃん、イク時にはちゃんと大きな声

で自分の名前と、イクことを管理人さんに伝えるのよ！」

麻子がそう命じると、萌々はもう理性がすっかり崩れ去ってしまったのか、喘ぎながらしっかりと頷いた。

而して、萌々は大股開きの下半身を次第に激しく震わせ始め、絶頂が迫っていることを窺わせた。

「あぁん、もうダメぇ・・・あぁぁん」

萌々はついに管理人に向かって切羽詰まった声を上げると、管理人の顔を切なそうに見つめながら大声で叫んだ。

「白石萌々・・・イっ、イキま～す！」

萌々は大股開きの下半身を上下に激しく痙攣させ、そのままガックリと項垂れた。

若妻の凄まじいイキ様を目の当たりにした六十代の管理人は、刺激が強すぎたのか、暫し唖然とした表情を浮かべ固まってしまっていた。

「まぁ厭らしいですねぇ。同じ女として恥ず

かしくなるわ」

麻子はイキ果てた若妻の姿を汚いモノでも見るような目で眺めながら、吐き捨てるようにそう呟いた。

それから程なくして快感の余韻から覚めた萌々は、自分が管理人の目の前でオ〇ニーしてイってしまったことを思い知り、どうしようもない自己嫌悪と羞恥に襲われた。そして、素っ裸の体を隠すようにその場に蹲ったのだった。

■海老沢薫ＢＬＯＧ

・・・海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/

■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

『清楚な美人妻　彩２７歳　絵画モデル編』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281

『清純派女優　結衣２４歳－国民のペットへと堕ちていくヒロイン－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802

『清純派女優　結衣２４歳－女神の憂鬱－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675

『女教師　玲奈25歳－女性教諭の前代未聞の不祥事－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186

『美人社長　里帆２６歳－若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885